

**森林を利用した村の発展**  
**バラム川中流域 ロング・ブディアン村において**  
加賀道（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

**期間：**2004年8月8日～2004年8月28日

**場所：**バラム川中流域 ロング・ブディアン村

**目的：**森林環境が村の発展過程でどのように利用されてきたのか明らかにしたい。今回の調査の目的は、次回長期調査に入るための体制を整えることと村の概要を知ることであった。

**背景：**サラワクは、1970年代後半から大規模な木材伐採が始まり、特にバラム川流域の森林と人々の生活は大きく様相を変えることとなった。住民は州政府や伐採会社との対立を経て、伐採会社という新たな雇用先が生まれ、また伐採道路によって都市への往来が容易になった。今回調査に訪れたカヤン人の村、ロング・ブディアンもこの例に漏れない村のひとつである。

当村では2000年に村へ通じた伐採道路により、村の暮らしが大きく変化したことが予想される。2004年には観光業にも力を入れ始めている。サラワク州としても木材伐採の次の収入源としてエコツーリズムに力を入れているが、この村ではどのような背景のもと観光に力を入れているのだろうか。また残された森林環境（資源）は村の発展にどのように使われているのか、伐採会社や伐採道路の影響により生業がどれだけ変化しているのか。

**活動内容：**

- ・ 次回の長期調査に向け、村長から調査許可を取得
- ・ 滞在受け入れ家族探し
- ・ 村の概要調査
- ・ マーケットを中心とした聞き取り調査

**調査報告：**滞在期間中、村長が不在だったため、調査の許しを村の取締役取りまとめ役をお願いし、また滞在先を探した。調査許可が下り、受け入れ家族も得て、次回からの調査の足がかりを作ることが出来た。

今回の調査では、周辺地域の中心になっているマーケットの調査を主に行った。以下にその報告を記す。

### 1. マーケット

村の入り口に位置するマーケットは、村人だけでなくプナン人や伐採キャンプで働く人、また観光客などさまざまな人で賑わう。もともとロングハウスの前で数件経営していた商店を1997年に場所を移し、村の資金で長屋状のマーケットを建設、村人から経営者を募集した。現在では38件の商店が連立している。もともと焼畑農耕民のカヤン人であるが、商店経営者からの聞き取りによると、大分農業離れが進んでいるように見受けられた（表1を参照）。現在も稲作を続ける者は、距離が遠く手入れの大変な陸稲よりも、近くに位置し手入れの比較的楽な湿地田のみを維持している人が多く見られた。

表-1：商店経営者(n=28)の農業離れ

状況	所有農地稲作用の種類		
	件数(人)	湿地	陸稲
稲作を実施	9	8	4
稲作をやめた	17	16	12
稲作の土地を所有していない	2	—	—

(2004年 筆者の聞き取りによる)

また、稲作をやめた商店経営者は、米を村人やプナン人から購入して賄っているということが聞き取りから明らかになった。林産物に関しても、今回の調査では定量的な調査を行わなかったが、大部分をプナンからの供給に頼っているようである。

## 2. 村の概要

ロング・ブディアンは焼畑農耕民族であるカヤン人の村である。人口は1600人、120世帯を持つ比較的大きな村である。とはいえ、出稼ぎなどにより常時村に暮らす人数は600人前後に過ぎない。1947年に自然宗教から改宗し現在では100%クリスチャン（Sidang Ingil Borneo）の村である。村には小学校、幼稚園、クリニックや図書館、また2002年にマハティールが村を訪れ、マレーシアのベスト・ビレッジに認定されると、政府プロジェクトとして衛星を使ったインターネット施設が建設された（発電機を使用しているため夜間のみ使用可）。現在では焼畑のほか、村での商店経営、自家用車を使った村と都市間の輸送業、近隣の伐採会社や都市へ出稼ぎなど、生業の種類が多様に変化している。当村は村人の団結が強く、現在でも村長を中心として住民による活動が積極的に行われている。

## 3. プナン人との関わり

カヤン人の村であるロング・ブディアンだが、その周辺にはもともと移動狩猟採集民であるプナン人の村が散在している。彼らはロング・ブディアンに林産物を持ち寄り、マーケットで現金と交換する。現金収入手段をほとんど持たないプナン人にとって、このマーケットは重要な役割を果たしているといえる。プナン人が持ち込む林産物はラタン（籐）から作った籠やマット、装飾品や、ブローパイプ、ナタなどのほか、森で採れたイノシシやシカ肉、魚、ヤシの若芽、更には米といった食料品にまで及ぶ。彼らは週に一度、伐採会社によるロング・ブディアンへの無料送迎が提供されており、調査しただけでも周囲約30キロに位置する15村のプナンが毎週ロング・ブディアンのマーケットを訪れていることになる。

## 4. 観光に関する動き

2004年から、ロング・ブディアンは観光に力を入れ始めている。当村は、サラワク第2の都市であるミリから車で約6時間のところに位置している。2000年にマレーシアで初めて世界遺産に指定されたムル国立公園へはそこから2時間でアクセスできる。現在のところ当村を訪れる旅行者の最終目的地はムル国立公園である。しかし短時間で楽に到達でき

る空路ではなく、伐採道路を 4 輪駆動車で訪れる旅行者は、旅の過程にも熱帯雨林の冒険的な気分を求めているのだろう。

現在ロング・ブディアンで行われている観光に関する活動内容は以下のとおりである。

- (ア) 村の保護林にある滝を利用した宿泊施設建設
- (イ) ホームステイプログラム
- (ウ) 村の宿泊施設「ホーンビル・ロッジ」
- (エ) ミリからの 4 輪駆動者によるガイド及び送迎  
(主にムル国立公園まで)

**今後の課題：**今後の調査では、まず村の生業などの基本的な村の構造をつかむことが当面の課題となる。また伐採会社が入ってきた 70 年代からの歴史的な変遷や、それに伴う生業の変化を生業調査や聞き取り、文献資料などにより整理する。また、村で行われる諸活動について村長などの中心人物からの聞き取りや、組織構成を調べ、政府との関わりについても考慮する。

博士予備論文では、彼らが村の発展のためにどのように森林環境を利用し、変えていくのかという点に関心を向け、前述したフレームの中で以下の点に注目する予定である。

- ① ロング・ブディアンの森林利用と発展活動を象徴するエコツーリズムについて
- ② ロング・ブディアン（カヤン人）とプナン人の森林産物利用の違いから見える“森”について

①では村の発展に利用される森林という視点のもと、その象徴としての観光開発に焦点を当てる。観光業に携わる村人や、中心となり活動を進める人、観光客などへの聞き取りをおこなう。

もうひとつの視点として②ではロング・ブディアンと周辺プナン村の森林利用に目を向ける。これは林産物の使い分けが存在するという仮説のもと、ロング・ブディアンとプナン人の間に発生する様々な格差の諸原因に迫るのが目的である。村の林産物利用とプナン人がマーケットへもたらす林産物についての定量的な調査を行い、住民とプナン人との森林利用の違いを比較する予定である。また、伐採会社による無料送迎が行われる以前と現在の違いや、関係村の広がりの有無についても調査する予定である。

上記の点を調査するに当たり、カヤン人としてロング・ブディアン村がどのような位置付けにあるのかを把握するため、周辺のカヤン村においても基本的な生業調査を行う必要があると考えている。

以上、博士予備論に向けた今後の調査では、彼らの生活環境である森林に注目を向けることで、変化してきた森林環境をどのように利用し、適応してきたのかを考察することが課題である。

**今後の調査予定：**2005 年 1 月下旬～3 月  
2005 年 6 月上旬～10 月